

優陀那日輝の「宗學」について

渡 邊 宝 陽

一 近世日蓮宗學の大成者・優陀那日輝（一八〇〇—一八五九）の宗學の網格については既に先學によつて考察されているが、日輝自身が「宗學」という語を意識して用いている點に留意し、検討を試みたい。

今日、我々は一宗の教義や歴史を研究する學問を稱して「宗學」と呼んでいるが、これは佛教學の確立に伴つて宗義に學問性を附與しようとする意圖をもつと思われ、比較的近年のことに屬するようである。それ以前には「宗乘」と呼ばれたが、それも日蓮宗においては、江戸時代における飯高・中村兩檀林をはじめとする諸檀林が明治初年日蓮宗大檀林として統合されてのちのことで、教科の編成に當つて宗乘と餘乘とをたてたのが最初ではないかと思われる。それ以前にはどのように呼ばれていたのであろうか。

二 日蓮宗教學史を瞥見すると、少くとも室町時代の頃は日蓮聖人の宗旨を御義といい、またその遺文そのものを御義と呼んでおり、その他宗義に約するという表現も見られる

（行學日朝—法華草案鈔、圓明日澄—法華啓運鈔等）。この場合、遺文に基づく宗旨が根本であつて、それを外延して行くところに宗義としての解釋、その組織化などが形成されているように思われる。そうした考え方は慶林日隆（一三八四—一四六三）にも共通するところで、例えば「當宗の學者宗旨を糺明せんと欲せば、先づ御抄の淵底を極め玄文止の深奥を盡し」（十三問答抄）という表現も見られる。このように室町時代においては日蓮聖人遺文を中心とし、天台の章疏等によつてその宗旨を把握し、實踐して行くというのが宗旨を學ぶことであるという一つの修學の型があるように思われる。

修學の態度については斷片的に諸處に述べられているが、一如日重（一五四九—一六二三）は學問する態度についてやや組織的に述べている。「入_ニ宗義_一先_ニ得_ニ首題_一元意_一、次_ニ伺_ニ經旨_一、次_ニ錄_ニ内外御書_一、次_ニ天台三大部學問_一、次_ニ餘章疏_一、次_ニ藏經周覽_一存也」（見聞愚案記三ノ一二）。このように日重は學問の順序次第・内容・構成を述べているが、ここでも中世と同様に日蓮

宗と天台宗とを御書と天台章疏とによつて分別して行く方法が見られ、そこに宗義の概念が形成されていると思う。しかし、日重は從來とやや異なつて廣く佛教一般や儒學等までも修學する必要を認め、その中心に宗義の學修をおいているのである。

後年、一妙日導（一七二四—一七八九）は教育機關である檀林が天台學中心であり、宗義學修にも天台學への傾斜が見られることに憤りをもつて宗學回復を志し、日蓮聖人遺文（祖書）によつて宗義の確立を圖つたが、その祖書綱要の卷頭に學者讃仰必有次第章を設けてこの宗學の方法を受繼いでいる。

日輝も亦これを讀み、「案撰主深悲三本宗學者不曉我宗實義、故切論學問本末、良可^ス善^ス」（綱要正義・充洽園全集第三卷二三四頁—以下、卷數・頁のみを記す）と述べつつも必ずしもそれをもつて拘束すべきではないといつてゐるが、ともあれ、日輝もこのような宗義の學修を繼承してゐるのである。そして、そのような傳統を繼承しつつ宗學という語はどのような意味を附與されていたのであろうか。

三　まず第一に日輝の宗學は祖書綱要を讚美し、それを繼承してゐるが、それは祖書綱要が信心を確立することに最大の眼目を置いたということに對する共感があつたからではないか。日輝は本妙日臨より信心堅固なる人格的影響を、一妙日導の綱要よりは宗學を繼承したとされるが、兩者は信

仰回復という共通性をもつてゐる。即ち、綱要が天台學傾斜への批判をなし、唱題を中心とする宗學回復に大きな役割を果したとして「迨^{シテ}頃年此書（祖書綱要）少行、唱題亦稍盛、蓋宗學將^{ラント}明之時乎」（綱要正義・三ノ二四五）と述べており、天台學の傾斜から脱して日蓮宗の信仰回復を圖る意識がその根底にある。しかし、日輝にとつて近世日蓮宗學の傳統は否定さるべきものではなかつた。日輝は折伏に偏執することは時代に適合しないと考え、また不受不施義を遵守して時世に入れられず、徒らに孤立を守る態度を否定した。そして、日重・日乾・日遠のいわゆる宗門中興の三師が天台學を興したことは、そうした偏狹な態度を改めさせ、文化發展の時世に對應して行く寛容な態度を養つたことに大きな意味を見出しているのであつて、それを「時ハ中興三師等臺學ヲ興スハ、宗家折伏ニ僻執スルノ弊ヲ矯メ、亦兼テ暗ニ文學興修ニ應ズ、今時ハ實ニ宗學興立ノ時ナリ、祖書綱要ノ如キ、其レ固ニ先導ノ師ト云フベシ」（學佛具眼鈔・四ノ三五九）と述べてゐる。

日輝の考える信仰回復は極めて寛容な態度を持しつつ、しかも萬人をして納得せしめるものであることを要求してゐる。日輝が深草の元政（一六二三—一六六八）を寛永第一祖と尊稱し、その上下に日蓮宗の展開を見出して行くところにそれは明瞭であり、本妙日臨（一七九三—一八二三）を本妙尊と

尊稱し、綱要を讀歎したのもそこに理由がある。随つて、その信仰は理智的な解了にもとづくものであり、普遍性をもつものでなければならぬ。そのような文化性、協調性を要求する所以は時代に適應しつつ、宗の實義を明らかにして行かうとする態度を基本とするのである。そして「三風俗文質、昔則質直信ニ佛教ニ、今文華爲風、則儒教漸盛、國學亦興焉、兒女賦詩、商估習文、王公紳臣不レ信ニ佛教、識者輕ニ賤僧徒、讀レ書者廢レ佛、爲レ文者惡レ僧、今時若不レ顧ニ習俗ニ徒偏ニ張權實、則爲所ニ白眼一笑、折伏強化寧不レ知ニ進否一乎」（四句格言辨・四ノ三一七）という時代と文化との認識があつたのである。

日輝は國學・儒道と比肩できる地位に佛教を高めねばならぬと考え、神・儒・佛三道論を述べており、そこに日輝の宗學はその全體が護法論の一典型としてとらえられているが、そのような位置に佛教を認めさせる爲には學解を必要とするのである。そこに「正助成敗頼ニ信解、信解開否頼ニ義學、冀有智導師務興ニ義學、以令ニ觀解明了、嗚呼可レ擇者信解哉」（綱要正義・三ノ二五〇）とも、「但信ヲ貴テ解了ヲ不レ欲ハ、自棄ニ非スヤ。」（妙宗本尊略辨・四ノ四〇七）とも述べる所以があり、信解を開くためには義學によらねばならぬとし、出家はつとめて義學を興さねばならぬとしているのであるが、義學とは宗義の學の意であらう。即ち、信と解とを車の兩輪

のように正常なものに運轉して行くものとして宗義の學を規定していると考えられよう。

勿論、宗義が宗門上世より繼承されたことはいうまでもないが、このように解了を非常に重く見つつ、信仰の學と規定したところに、（宗の）義學の特色が見出されるのである。事實、日輝は一念三千論を著わして斯道の存することを誇稱し（新居日薩・同書序）、また妙宗圓通記、佛界一覽抄など初心向けの指導書をも著わしているのである。このような意味で、日輝は日蓮宗一致派の廣學主義・攝受主義を繼承しつつ、義學へと展開させたものと見る事ができる。

四 更に、日輝はしばしば實道・實義・實理・實道の學などの語を用いており、宗學においても實學でなければならぬと考えているのである。

日重や日導は天台學及び佛教一般の學をもつて宗義の學修の補助としてゐるけれども、日輝の認識においては、もはや佛教の内にのみ宗學の在り方を規定しようとすることは無意味なのであつて、滔々と押寄せてくる排佛論等の波に對して、佛教は實理であり、實の宗學が成立することを示して行かねばならないと考えている。即ち、「臺家ノ學ヲ以テ宗學ノ先務ト謂ヘルハ、是レ宗家今時ノ當病也、一致勝劣各門ノ學校、通シテ台學ニ局セル故、初學其非ヲ不レ知ノミナラズ成學ノ者モ亦皆實道ヲ不レ知」（學佛具眼鈔・四ノ三六〇）と述べ、排佛

論こそまさに佛教覺醒の眞藥と見做している。そして、もと佛教には方便が多く、實義は極めて僅かしか顯れていないのであるとし、宗祖の折伏をもそのようにとらえて云う。「佛教本ト方便ヲ專トシ實義見ガタシ、祖師モ亦時機ニ契フヲ先トシ、且ツ實義甚ダ隱レタリ、徒ラニ空拳ニ惑ヒ虚語ニ縛セラレ、佛祖ノ證道本懷ヲ覺ラズ濫ニ折伏ヲ守ル、復タ憐ムベシ」(攝折進退論、四ノ三三八)そして「教門ノ方便ニ拘泥セズ、須ク證道ノ實義ヲ尋討スベシ」(學佛具眼鈔、四ノ三五〇)と述べ、證道をもつて佛教の實義であるとし、教門教相はそれを詮顯するための方便であると考えている。

日輝のいう實の證道とは、「夫レ實道ノ宗要ハ、自身是佛ノ義ヲ了達シ、生死ヲ不_レ怖_レ五欲ニ不_レ著_レ、四魔ヲ降伏シ、四恩ヲ報シ、三軌ニ安住シ、四德ヲ保全シ、衆生ヲ利益シ、國界ヲ嚴淨スルニアリ」(學佛具眼鈔、四ノ三五二)に示されるような、いわば安心の境界を實道とするのであり、それに到らせる教門教相が方便である限り、實の證道を確立する實の宗學が要求されるのである。そうでないものは虚學として捨て去られなければならない。そこでは、「初心ノ學者徒ラニ舊慣ニ從フノミ」(學佛具眼鈔、四ノ三六〇)という態度を捨てなくてはならず、佛縛・祖縛・自縛というような實の證道の妨げとなるものから脱却せねばならないと説くのである(四ノ三五八)。

ここに實の宗學の成立を必要とする理由があるのであるが、ここにいう實學は近世中期より盛んになる科學思想を強調する實學とは全く異なり、またその影響を受けた儒教の經世濟民の實學論とも、異なるものである。しかし、國學や儒學に對する佛教の位置に思いを致し、佛教の安心證道が虚論・虚道でなく、實論・實道であることを開顯する實の宗學を樹立せねばならぬと考えた點において、極めて間接的な形で實學思想という時代思想の影響を受けたといえないであらうか。

ともあれ、日輝は「今優陀那日輝是ヲ顯露ニ説破スルハ時節到來スル故ニ、無間自説シテ佛日ヲ光輝セント欲スル也、今ヲ發端トシテ實道ヲ發揮スル人漸々ニ出ツベシ」(學佛具眼鈔、四ノ三五二)というように宗學樹立の自負を述べているのである。日輝はしばしば觀心・證道を重視し、その宗學が觀心宗學と呼ばれたことには、このような宗學の基底があるのである。

五 以上のように、日輝は近世日蓮宗一致派の宗學を繼承しつつ、天台學の影響から宗學の獨立を圖るとともに、時代の文化の中に證道の實義を顯し、佛教を價值あらしめる宗學を樹立しようとしたのである。そして、明治以後に日輝の宗學は祖述されたのであるが、このような宗學の意識は必ずしも繼承されたとはいえないのではあるまいか。この點については他日檢討を試みたいと思う。